

暁鐘の音

123

チェンジリーダー

ハンセン病患者に対する一審の判決に対して、政府（というより小泉首相）は、控訴しないという判断を下した。ほとんどの人は無理だろうと諦めていたと思われるだけに、この判断によって、日本中に大きな衝撃が走った。「出来るんだ」という思いが日本中に駆け巡ったことだろう。

役人達は、ここで控訴を断念すると、HIVの裁判など、その他の進行中の裁判に混乱を与える思っただろう。「では、自分たちの裁判は何なんだ」ということになってしまふから。その思いが、今日まで「前例」から踏み外さない力となっていたし、社会の流れが変わらなかつた理由の一つである。これまでと同じ対応をしておれば、役人も政治家も楽なのである。いや、彼らだけでなく、人は皆そうなのかもしれない。だがこれでは、本当に何も変わらない。一九九〇年代の一〇年間、変化が求められていたにもかかわらず、まさにこうして変化する機会を潰してきたのである。

決定が出来なかったのも同じ思考が働いていると思われる。一人ひとりが自分の判断で前例を断ち切れないと思ひ込んでいた。少なくとも、その判断は、自分の職場の先輩の判断を覆すことになる。そうすると、それをきちんと説明しなければならぬし、これまでもいろいろと世話になったという思いもあるだろう。それらが自分を縛る縄となつてしまつていたのである。



今回、小泉首相によって、そのような前例を断ち切るかのように、新しい判断が行われた。そして、役人も、控訴しないという事で、それに対応すべく一斉に動いたのである。なんて事はない。「前例」という縄は、実在しなかつたのである。これまで自分を縛っていた縄は、自分の弱さを隠すために持ち出した妄想であつた。自ら「判断」することを避ける気持ちだが、「前例の縄」を持ち出しただけなのだ。

今回の決定に、久しぶりに「リーダーシップ」の姿を見た思いがする。トップが方向を示して動き出せば、強力な（はずだった）「前例の縄」も、簡単に切れてしまふ。そうして、みんなが新しい方向に動き出すことができる。これがリーダーの役割なのである。

これからの首相は「かくあるべし」という前例「さえも作つたかも知れない」。

い。この後に首相になった人が、以前のような形（スタイル）では首相が出来なくなつたのではないか。そんなことをしようものなら、日本中から「総すかん」を食らつてしまふだろう。

日産自動車の今年の春闘でも、労組の要求に対して、ゴーン社長は要求を受け入れることを即答した。このときも、周りの人たちは即答は前例に無いという事で反対したという。最終的に要求額を飲むにしても、表面上は何度か交渉して、その結果として発表すべきだと主張した。だがゴーン社長は、そんな無駄なことは撥ね付けた。役員達は、別に悪気でもそのようなことを主張したわけではない。「前例」で自ら縛つてきた彼らとしては、「前例」を破ることが出来ると思つていなかっただけだ。ここでも見えない縄に自らを縛つていただけなのである。ゴーン社長は、いとも簡単にその縄を切つてしまつた。この瞬間、今まで前例に囚われていた役員達は、「前例」は壊しても良いのだということを知つたのである。そして、彼らは一斉に動き出した。もう「前例」に囚われる必要はない。いや、「前例」に囚われる必要はない」という前例を作つてしまったのかも知れない。

定できない。皆が同じように「前例」で縛られている間は、ある意味では、現状維持に働くので不利な状態にはならない。だが、社会に影響を与えるような企業が一つでも「前例」の縄を解くことに成功し、業績の形でその効果が表面化したとき、これまでの相互の安定は崩れてしまふ。そして、前例の縄を解く競争に入っていく。

このとき問われるのは、その企業がリーダーシップを発揮できる人材を有しているかどうかである。あるいは、そのような人材を外部から受け入れることが出来るかどうかである。日産の場合、当時の社長がその下地を作つたし、業績などの状況がそれを受け入れ

今月の一言

「かくて私はこう考える。生徒の勉強は性格の訓練であつて、知性の訓練ではない。正書法であれ、翻訳であれ、計算であれ、問題は意欲するすべてを学ぶことである。気分を克服することである」(アラン)

だが、現在の日本の多くの経営者は、「前社長の経営方針を引き付いていく」ことを前提で社長に就任している。しかも、殆どがその前社長の推薦を受けての就任であるし、その前任者は、コブのように組織の残つていたため、自分の考えで「リーダーシップ」を発揮することは容易ではないかも知れない。だが、新しい商法の下で、株主の意向を受けた取締役会から、執行役員が経営の依託を受ける形になったとき、これまでの「前例」を変える「チェンジリーダー」が生まれる可能性が高くなるだろう。

○年後の自分にどのような影響をもたらすかは知る由もないし、教師（先生ではない）も、そのことを気付かせることができない。

今日、労働のミスマッチが問題になっている。また仕事においているが、多くの人は、「意欲する術」や怠惰に陥る「気分を克服する術」を身に付けてこなかつたことに直面するのである。確かに、学校で習つた「知識」は役に立たないかもしれない。だが、そこで身に付けた「術（すべ）」は、その人の性格の一部となつて、一生、その人を支えるのである。